

ガザ：ジェノサイドのためのDolus Specialis / Mens Reaの証明

イスラエルの最も熱心な擁護者でさえ、ガザでのその行動が1948年のジェノサイド条約に基づくジェノサイド行為の基準 - **actus reus** - を満たしていることを否定しなくなりました。家族全体が抹殺され、生命に不可欠なインフラが意図的に破壊され、200万人以上の人々から基本的な必需品が体系的に奪われています。残る問題 - ジェノサイドを「単なる」大量虐殺から分けるもの - は意図に関するものです：イスラエルはこれらの行為を、ガザのパレスチナ人をそのようなものとして、全体的または部分的に**破壊する意図**をもって行ったのか？

ジェノサイド条約は、この意図 (**dolus specialis**) をどのように証明するかを定義していません。しかし、国際的な判例法はそれを定義しています。ニュルンベルク裁判からルワンダ国際刑事裁判所 (ICTR)、そして国際司法裁判所 (ICJ) の画期的な判決において、裁判所は一貫して**意図は推定できると認めてきました**。基準には以下が含まれます：

- 行為自体の**体系的な性質**、
- 政府高官による**公的または私的な声明**、
- イデオロギー、プロパガンダ、または扇動の防止の失敗を通じた**裏付け**。

このエッセイは、これらの同じ基準を適用します。イスラエルのガザでの行動が、破壊の規模だけでなく、**途切れのないイデオロギー的な系譜**を通じて、ジェノサイドの法的定義を満たしていることを示します：初期のシオニスト指導者から現代の閣僚に至るまでの、1世紀にわたる排除主義的なレトリック。これは最近の逸脱ではなく、長年にわたる政治的プロジェクトの集大成です。

イスラエルは、ジェノサイド条約の第II条に列挙された5つの禁止行為のうち**少なくとも4つ**を満たしており、誠実な**テレオロジカル**解釈を通じておそらく5つすべてを満たしています。しかし、**数十年にわたる処罰されない扇動、優越主義イデオロギーの制度的正常化**、そして2024年のクネセットの手紙によって最も明確に例示される**殲滅政策の成文化**が、意図を明確にしています。

ジェノサイドの犯罪は、実行者がその目的を宣言することを要求しませんが、この場合、彼らはそうしています。

ジェノサイド条約：法的基準と5つの禁止行為

ジェノサイド条約の**第II条**によると、ジェノサイドとは以下を意味します：

以下のいずれかの行為で、国民的、民族的、人種的、または宗教的グループをそのようなものとして、全体的または部分的に**破壊する意図**をもって行われたも

の：

1. グループのメンバーの殺害；
2. グループのメンバーに重大な身体的または精神的危害を加えること；
3. グループにその物理的破壊を全体的または部分的に引き起こすように計算された生活条件を意図的に課すこと；
4. グループ内で出生を防止する措置を課すこと；
5. グループの子供を別のグループに強制的に移送すること。

イスラエルのガザでの行動は、**5つの基準のうち4つ**を明確に満たしており、テレオロジカルな解釈を通じておそらく5つ目を満たしています。

Dolus Specialisの確立：法的先例と証拠基準

国際法は、ジェノサイドの意図の複数の形態を認識しています：

- **明示的**：破壊の意図を公然と宣言する声明または文書。
- **推定**：グループを標的にした体系的な行為から。
- **裏付け**：プロパガンダ、イデオロギー、または扇動に対する無行動を通じて。

先例には以下が含まれます：

- **アカイエス (ICTR)**：意図は文脈と協調した行動から推定できる。
- **クルスティッチ (ICTY)**：スレブレニツァ虐殺は範囲が限定されていたにもかかわらずジェノサイドと分類された。
- **ボスニア対セルビア (ICJ)**：国家は扇動を防止し罰する義務があり、意図は繰り返される無行動から推定できる。

イスラエルは扇動を防止するだけでなく、それを制度化し報奨しています。

歴史的規範に対する行動からのDolus Specialisの推定

ジェノサイドの意図 (**dolus specialis**) は、特に保護された民間人集団を圧倒的に標的にする体系的な行為から推定できます。イスラエルのガザでの行動は、それ自体の条件でさえ、現代の戦争で見られたものをはるかに超えています。あらゆる領域 - 民間人の標的化、インフラの破壊、爆発物のトン数、包囲の期間 - で、イスラエルの行動は歴史的に極端であり、法的に非難されるものです。

民間人の意図的標的化

IDF自身の内部評価によると、最近メディアにリークされた情報では、ガザで殺された者の**83%が民間人**であり、**ほぼ半数が子供**でした。この数字は、その規模だけでなく、IDF自身から来ているため非難されるべきです - 戦闘年齢の男性を「戦闘員」と分類し、証拠なしに「ハマスとの関連」を定期的に主張することで知られる軍事機構です。この民間人の死亡率は、ア

フガニスタン、イラク、シリアを含むすべての現代の紛争を上回り、そこで民間人の犠牲者の割合はかなり低かったです。

意図的な標的化の最も統計的に反論できない指標の一つは、**ジャーナリストの大量殺害**です。2025年半ばまでに、2023年10月7日以降、ガザで**250人以上のジャーナリスト**が殺されています。これは**記録された歴史上のどの紛争**、世界戦争や数十年にわたる反乱を含む、よりも多いです。ガザでのジャーナリストの死亡率は**年間130人を超え**、ほとんどの戦争ではその数が一桁をわずかに超える程度です。統計的には、これにより**zスコアが96を超える**ことになり、偶発的な事故は数学的にありえないものとなります。イスラエルがガザでの外国メディアの全面禁止と組み合わせると、これらの殺害が偶発的ではなく、体系的であることを強く示唆します - **目撃者を黙らせる意図**があります。

民間インフラの前例のない破壊

今日のガザは、地球上で最も体系的に破壊された都市環境です。衛星画像と国連機関、人権団体、世界保健機関からの現地報告は、**すべての民間ビルの70%以上** - 住宅、アパート、病院、学校、モスク、農業地 - が破壊または居住不能にされたことを確認しています。**病院の標的化**だけでも現代に類を見ません：数十の主要施設が繰り返し攻撃され、**アル・シファ、アル・クドス、ナセル、カマル・アドワン**など、多くのものが完全に破壊されました。

水の脱塩プラント、廃棄物処理センター、ソーラーパネル、パン屋、救急車隊も体系的に標的にされています。ガザが重要な資源の輸入ができない状況で封鎖されている文脈では、この破壊は単に戦術的ではなく、**民を全体的または部分的に破壊するように計算された生活条件の意図的な課し**を構成します。

国際的な監視者、**国連、WHO、IPC、WFP**はすべて、**飢饉が戦争の武器として使用されている**と明確に述べ、国際人道法の明白な違反であり、ジェノサイド行為の特徴です。

爆発物のトン数がすべての歴史的先例を超える

2023年10月から2025年半ばまでに、イスラエルはガザに約**10万トンの爆発物**を投下しました。これは広島に投下された爆弾の力の約**7倍**です。そして、**ロンドン、ドレスデン、東京**の爆撃が数年にわたり、または全面戦争中に起こったのに対し、ガザの破壊はわずか**18か月**で、ロンドンの**3分の1未満の大きさの閉鎖された地域**で起こりました。

現代の歴史上、こんなに密集した人口中心地が - そしてそれほど封鎖された - この量の火力にさらされたことはありません。第二次世界大戦の火炎爆撃でさえ、民間人に**逃げる可能性がない**単一の飛び地にこの規模の破壊が課されたことはありませんでした。

現代および古代の歴史における最長かつ最も完全な包囲

歴史を通じて、包囲は通常、生存のための最小限の生命線を含んでいました。ナチスの**レニングラード包囲**（1941-44）では、ソビエト連邦が**ラドガ湖**を越えて都市に援助を供給しました。**スターリングラード**（1942-43）では、補給品と援軍が**ヴォルガ川**を越えて火の下で移動

しました。**サラエボ**（1992-96）でも、密輸トンネルと**国連の空輸**により、困難ではあったものの、食料、医薬品、民間人の流れが可能でした。

対照的に、**ガザの包囲は完全**です。2007年以来、イスラエルはすべての国境、領空、海へのアクセスを制御し、食料、燃料、医薬品、建設資材の輸入を拒否してきました。**2023年10月以降**、封鎖は**完全な包囲**にエスカレートしました：出入りなし、機能する国境通過点なし、航空回廊なし、人道的な生命線なし。**パン屋、ソーラーパネル、テントキャンプ**さえも意図的に爆撃されています。**2025年3月**、イスラエル政府は食料と水を明示的に含む「ゼロ進入」の政策を再確認しました。

ガザは**現代の歴史で最も長い継続的な包囲**（18年）と、**古代または現代で記録された最も完全な包囲**の記録を保持しています。これまで**230万人の人口**、その半分が子供たちが、世界から閉ざされ、容赦なく爆撃され、この期間にわたって生活の基本的な必需品を奪われたことはありません。

結論：生存の奇跡

法的に、グループを「そのようなものとして」破壊する意図は、**軍事キャンペーンの論理に明確に書かれている**とき、声に出して言う必要はありません。しかし、ガザでは、そのベールさえも落ちました：行動はパターンに一致し、レトリックは目的を確認します。ガザにまだ生きている人がいるという事実は、イスラエルを免罪するものではなく、奇跡です。**法的に**、その奇跡は法がすでに明確にしていることをそらすことはできません：**これはジェノサイドであり、行動と意図によるものです。**

処罰されない扇動の世紀：時系列順の引用

アカイエス、ボスニア対セルビア、およびその他の国際的なケースで認められているように、ジェノサイドの意図は、**当局者の公的および私的な声明**から、特にそれらの声明が非難されず、**制度化され報奨された場合に推定**できます。**ジェノサイド条約**によると、署名国は**ジェノサイドを犯さないだけでなく、直接的かつ公的なジェノサイドへの扇動を防止し罰する義務**があります。イスラエルはその逆を行ってきました。

ジェノサイドへの扇動は、イスラエルの政治的言説において**日常的かつ正常化**されているだけでなく、**高級閣僚、連立MK、軍の将校、影響力のあるメディアパーソナリティ**によって公然と放送され、しばしば神学的または排除主義的な言語を使用しています。これは偶発的ではありません。**大量絶滅の呼びかけが容認されるだけでなく、政治的進歩の資格として機能する政治的気候を反映**しています。

以下の引用は、孤立した爆発ではなく、**一貫したイデオロギー的に埋め込まれた扇動のパターン**を示しています。イスラエル政府はこれらの声明を罰する、または距離を置く努力をしていません - それどころか、引用された多くの個人は閣僚ポストに昇進し、クネセットに再選され、または**主要な防衛ポストに任命**されています。この扇動を防止または罰する体系的な失敗は、条約の第III条(c)の違反であり、単なる過失ではなく、**ジェノサイドイデオロギーの制度的承認**です。

「我々は、通過国で雇用を確保することで、貧困な人口を国境を越えて移送しようと試み、わが国での雇用を一切拒否する。」

- テオドール・ヘルツル、1895年6月12日、政治的シオニズムの創設者、日記の記述

「アラブ人を追放し、その場所を取らなければならない…力を使わなければならない場合…我々には力がある。パレスチナ人の強制移送は…我々が持ったことのないものを与えてくれるかもしれない。」

- ダビッド・ベン＝グリオン、1937年10月5日、イスラエル初代首相、息子への手紙

「両方の民族のための余地はない…一つの村、一つの部族も残すべきではない。アラブ人は去らなければならないが、戦争のような好機が必要だ。」

- ヨセフ・ワイツ、1940年12月20日、ユダヤ国民基金の土地部門の責任者、書面報告

「パレスチナの村々を一掃しなければならない。」

- ダビッド・ベン＝グリオン、1948年、イスラエル初代首相、ナクバ中の公開演説

イスラエルは**1949年12月17日にジェノサイド条約に署名し、1950年3月9日に批准しました。**条約の第III条は、ジェノサイド自体だけでなく、「**ジェノサイドを犯すための直接的かつ公的な扇動**」も処罰可能な犯罪とします。

1977年、イスラエルは**刑法（改正第39号）**を制定し、国際犯罪を国内法に統合しました。**第144B条および144C条**は、人種差別および暴力への扇動を犯罪化します。理論的には、ジェノサイドへの扇動はこの法的枠組みに該当します。

「ガザ地区全体の征服とすべての戦闘部隊およびその支持者の殲滅。ガザはドレスデンになる必要がある…今すぐガザを殲滅せよ！すべてのガザ人は破壊されなければならない。」

- モシェ・フェイグリン、2014年8月、元クネセット議員および極右指導者、公開計画およびインタビュー

「ガザを平らにせよ。慈悲なく！今回は慈悲の余地はない！ガザは平らにされ、彼らが殺した一人に対して千人殺せ。」

- レヴィタル・ゴットリーブ、2023年10月7日、イスラエルクネセット議員（リクード）、X投稿

「今すぐナクバ！1948年のナクバを凌駕するナクバだ。ガザを瓦礫に変える。」

- アリエル・カルナー、2023年10月8日、イスラエルクネセット議員（リクード）、X投稿

「ガザ地区に完全な包囲を命じた。電気も食料も燃料もない。すべて閉鎖されている。我々は人間の動物と戦っており、それに応じて行動している。すべての制

約を解除した…すべてを排除する。」

- ヨアヴ・ガラント、2023年10月9日、イスラエル国防相、公開演説

「ガザのすべての民間人に直ちに立ち去るよう命じた。彼らが世界を去るまで一滴の水も単一のバッテリーも受け取らない。電灯のスイッチは入らず、水道の蛇口も燃料トラックもない。」

- イスラエル・カツツ、2023年10月12日、イスラエルエネルギー相、X投稿

「そこにいるのは責任を持つ全民族だ。民間人が知らない、関与していないというレトリックは全く本当ではない。ガザに無垢な人はいない。」

- アイザック・ヘルツォグ、2023年10月13日、イスラエル大統領、記者会見

「ガザに入るべき唯一のものは、空軍からの数百トンの爆発物であり、人道的援助の1オンスもない。」

- イタマール・ベン＝グヴィル、2023年10月17日、イスラエル国家安全保障相、X投稿

「審判の日の武器の時だ。近隣を平らにするのではなく、ガザを押しつぶし平らにする。今すぐガザを燃やせ、それ以下ではいけない！飢えと渇きがなければ、協力者を募集できない。」

- タリー・ゴトリヴ、2023年10月10日、イスラエルクネセット議員（リクード）、X投稿

「聖書に言う、アマレクがあなたに何をしたかを覚えていなければならない。ガザを無人の島に変える。」

- ベンヤミン・ネタニヤフ、2023年10月28日、イスラエル首相、テレビ演説

「ガザを地球上から消し去れ。アマレクの記憶を消し去る必要がある。」

- ガリット・ディステル＝アトバリヤン、2023年11月1日、元イスラエルクネセット議員および閣僚（リクード）、X投稿

「我々は今、ガザのナクバを展開している。ガザに無垢な人はいない。」

- アヴィ・ディヒター、2023年11月11日、イスラエル農業相および元シンベト長官、テレビインタビュー

「選択肢の一つはガザに原子爆弾を落とすことだ。私はそれを祈り、望む。ガザに無関係な民間人はいない。北ガザはこれまで以上に美しい。すべてを爆破するのは素晴らしい。」

- アミチャイ・エリヤフ、2023年11月5日、イスラエル遺産相、ラジオインタビューおよびX投稿

「ストリップでの重度の疫病は我々を勝利に近づける。ガザは人間が存在できない場所になる。」

- ギオラ・エランド、2023年11月19日、IDF退役少将および元国家安全保障会議長、Yedioth Ahronothに掲載された論説

「私はガザの廃墟を個人的に誇りに思う。そして、80年後でさえ、すべての赤ちゃんがその祖父母にユダヤ人が何をしたかを話すだろう。ガザ人にとって死よりも苦痛な方法を見つける必要がある。」

- メイ・ゴラン、2023年12月12日、イスラエル社会的平等および女性の進歩担当相、クネセットおよび会議での演説

「ガザを地球上から消し去れ…ガザは燃やされなければならない。今、我々すべてに共通の目標がある - ガザ地区を地球上から消し去ることだ。」

- ニッシム・ヴァトゥリ、2024年1月10日、クネセット副議長（リクード）、ラジオインタビュー

2024年1月、国際司法裁判所（ICJ）は、ジェノサイドへの扇動の防止と処罰を含む、法的拘束力のある暫定措置を発行しました。

「中途半端な措置はない…ラファ、デイル・アル・バラ、ヌセイラト - 完全な殲滅。『アマレクの記憶を天の下から消し去るべし。』200万人を飢えさせることは正当かつ道徳的かもしれない。ガザは完全に破壊される…彼らは第三国に大量に去る。一粒の小麦もガザに入らない。」

- ベツァレル・スモトリッチ、2024年4月29日、イスラエル財務相、ミムーナイベントでの公開演説

「今日、我々はフーシ派に闇の疫病をもたらした…次は - 初子の疫病。」

- イスラエル・カツツ、2025年8月24日、イスラエル国防相、X投稿

プロパガンダの枠組み：正常化された憎悪、洗脳、排除のイデオロギー

国際法では、ジェノサイドの意図（*dolus specialis*）は、犯された行為の規模と体系的な性質だけでなく、**プロパガンダ、イデオロギー、扇動を防止または処罰しないことなどの裏付け証拠**からも推定できます。この原則は判例法で確立されています：**アカイエス判決（ICTR）**では、「大規模なヘイトスピーチの拡散」が意図の証拠として引用され、**ボスニア対セルビア（ICJ）**では、知られた扇動に対する国家の繰り返される無行動がジェノサイドの意図の認定を支持するとされました。

イスラエルでは、この裏付け証拠は周辺的ではなく、中心的です。スローガン

「**アラブに死を**」は周辺的なレトリックではありません。それは**広く容認され、公式に護衛された唱和**であり、占領下の東エルサレムで行われる、イスラエル警察によって許可および保護された**エルサレム旗行進**で毎年繰り返されます。非難されるどころか、このような言論は公共の言説で正常化され、**校庭、サッカースタジアム、ナショナリストの集会**で反響しています。

さらに重要なことに、イスラエル国家機関内で機能する**シオニズムのイデオロギー構造は、優越主義的な前提に浸透しています**：パレスチナ人は人口学的脅威、実存的敵、またはユダヤの主権に対する非人間的な障害であると。このイデオロギー枠組みは潜んでいるのではなく、**公然と教えられ、強化され、武器化されています**。著名なイスラエル当局者は、パレスチナ人を

「人間の動物」、「アマレク」、または「駆除すべき昆虫」と定期的に呼びます。これらは失言ではなく、体系的かつ承認されたジェノサイド暴力への扇動**です。

元シオニストやイスラエルの内部告発者による多数の証言は、**幼少期から始まる洗脳**を記述し、パレスチナ人は隣人や権利を持つ人々としてではなく、危険な侵略者として描かれています。元IDF兵士、教育者、元ナショナリストは、**恐怖、権利、非人間化の文化**の中で育てられ、**IDFはユダヤ人を殲滅から守るために存在する**と教えられ、パレスチナ人への同情は裏切りの形であると証言しています。

ブレイキング・ザ・サイレンスなどの組織や、ジャーナリスト、元兵士は、軍事訓練がこれらの考えを強化し、**パレスチナ人の命を犠牲にしてもよいもの**として枠組み、戦争犯罪を正当な戦術として扱うと報告しています。神学的イメージ（「アマレク」、「聖書の復讐」、「初子の疫病」）の使用は、このイデオロギーを宗教的に承認された殲滅の物語にさらに埋め込みます。

これらすべては、国際判例法で確立された**ジェノサイドの意図の裏付け証拠**の基準を満たし、おそらく超えています。プロパガンダが**遍在し**、イデオロギーが**制度化され**、扇動が**罰せられず抑制されない**とき、それはジェノサイドのイデオロギーインフラを形成します。

すべての証拠基準を超えて：クネセツの手紙としての政策の直接的な承認

2024年12月31日のイスラエル**外務・防衛委員会**のメンバーからの手紙は、**ニュルンベルク裁判**および**ヴァンゼー会議**以来、どの国家によっても作成された**ジェノサイドの意図を証明する最も明確で明白な政策文書**であると言えます。以前のジェノサイドでは、検察官が暗号化された言語や間接的な計画から意図を推定する必要がありましたが、この手紙は**曖昧さを残しません**：IDFが**エネルギー、食料、水のインフラを破壊し、致命的な包囲を課し、白旗を表示しないすべての者を排除する**ことを公然と要求しています。

日付：2024年12月31日

宛先：国防相イスラエル・カッツ

件名：ガザ地区の作戦計画

拝啓、

我々、外務・防衛委員会のメンバーとして、これまでの深刻な結果と今後の見通しを鑑み、ガザ地区での戦闘の作戦計画を再検討するよう要請するためにこの手紙を書いています。以下に詳細を述べます：

ガザ地区での作戦活動は、2023年10月27日の地上作戦開始前にも前国防相によって外務・防衛委員会に提示され、その後現場で実施されてきましたが、政治的指導部によって定義された戦争の目標：ハマスの統治および軍事能力の崩壊を達成することができません。これらの目標は、今日まで実現されていません。小さな領土であり、敵が近代的な軍のツールや能力を持たないにもかかわらずです。

参謀総長が公に指摘したように、IDFは標的を絞った襲撃を通じて活動しています - この種のゲリラ戦において中心的な要素である「支配」を欠く方法です。領土と住民の効果的な支配は、ストリップから敵の拠点を一掃し、決断と勝利を達成するための唯一の基盤であり、停滞や消耗戦ではなく、消耗する主な側がイスラエルである戦争ではありません。そのため、我々は何度も占領した近隣や路地に兵士を繰り返し送り込み、IDFのシニアリーダーシップがハマス大隊が解体され破壊されたと宣言し、敵から解放されたと述べた場所で、血で恐ろしく耐え難い代償を払っています。

2024年10月6日から、ガザ地区北部、メファルシム軸の南で異なる作戦が始まり、住民の南への包囲と避難が含まれていました。我々は皆、これが求められる変化をもたらす軍事行動の始まりとなることを望みましたが、この行動が適切に実行されていないようです。つまり、包囲と人道的避難の後、IDFは国際法およびすべての西側軍で慣例であるように、残っている者を敵として扱わず、密集した建築地域に入ることによって我々の兵士の命を再び危険にさらしています。

包囲と住民の避難後、IDFの指示は明確であるべきです：

1. すべてのエネルギー源の遠隔からの破壊 - 燃料、ソーラー設備、パイプライン、ケーブル、ジェネレーターなど。
2. すべての食料源の破壊 - 倉庫、水、水ポンプ、その他の関連手段。
3. 有効な包囲の期間中に白旗を持って現れないエリア内を移動する者の遠隔からの排除。

これらの行動と残っている者に対する包囲の日々の後、IDFは敵の拠点の完全な一掃を実行するために徐々に入るべきです。これはストリップ北部で行われ、他のすべてのセクターでも同じ方法で実施されるべきです：包囲、住民を人道的エリアに避難させ、降伏または敵の完全な排除まで効果的な包囲を行う。これはすべての軍が運営する方法であり、イスラエル国防軍もそうすべきです。

外務・防衛委員会での繰り返しの質問と要請にもかかわらず、IDFの代表者から、なぜ要求通りに活動していないのか、ハマスの敗北が戦闘の「作戦的終了状態」として定義されている理由、将来の計画は何かを、満足のいく回答を得ていません。そのため、これらの質問への回答を提供し、IDFに適切な指示を発行するために、即時の介入を要請します。決定を達成し、正当化なしに我々の兵士の命を危険にさらすのをやめるためにです。

写し：

- 首相ベンヤミン・ネタニヤフ - 外務・防衛委員会議長MKユリ・エデルシュタイン

署名者：

* アミト・ハレヴィ、リクード、MK、外務・防衛委員会 * ニッシム・ヴァトゥリ、リクード、クネセット副議長、外務・防衛委員会 * アリエル・カルナー、リ

クード、MK、外務・防衛委員会 * オシェル・シェカリム、宗教シオニズム、MK、外務・防衛委員会 * ツビ・スッコット、宗教シオニズム、MK、外務・防衛委員会 * オハド・タル、宗教シオニズム、MK、外務・防衛委員会 * リモール・ソン・ハル＝メレフ、ユダヤの力、MK、外務・防衛委員会 * アブラハム・ベツァレル、ユダヤの力、MK、外務・防衛委員会

これらの指示は単に戦術的ではなく、**民間人集団の意図的な殲滅の青写真**を構成し、そのようなものとして、国際刑事法の既存の基準でジェノサイドの意図を証明する**法的閾値を超えています**。著者は低レベルのアクターや周辺の過激派ではなく、**国家安全保障政策の立案で役割を果たす選出された立法者**です。彼らの要求は**比喩的ではなく**、国家戦略として明確に枠組みされた**人口の根絶の具体的かつ逐次的な方法**を概説しています。

ナチスの役人がしばしばジェノサイド計画を婉曲表現（「最終解決」）で隠したのに対し、この手紙は明確に語ります。それは意図、方法、正当化を文書で、イスラエル政府の公式な承認の下に概説します。歴史上、どの法廷もこれより明確な証拠を要求していません。

このような文書の存在は、**もっともらしい否認の可能性を消滅させます**。それは、さもないければジェノサイドの状況証拠と見なされるものを、**政策レベルの計画、実行、殲滅行為のイデオロギー的正当化の直接証拠**に変えます。国際法の下で、この手紙は**明白な証拠 - dolus specialis**の明示的な告白として扱われるべきであり、最高レベルの政府によって承認されています。

結論：合理的な疑いを越えた意図の証明 - 観察だけでなく行動する義務

1948年の条約に基づくジェノサイドの犯罪は、**禁止された行為（actus reus）と保護されたグループを全体的または部分的に破壊する意図（dolus specialis）**の両方を必要とします。この分析が示したように、**イスラエルのガザでの行動は、5つの禁止行為のカテゴリーすべてを満たし**、パレスチナ人を「**そのようなものとして**」破壊するその意図は、作戦の規模と標的化から推定できるだけでなく、**そのレトリックで明示的、その制度で体系的、その政策で成文化**されています。

証拠 - 法的、統計的、軍事的、イデオロギー的 - は「**合理的な疑いを越える**」国際的な閾値を満たしています。ガザで展開されているものは、曖昧または境界線上のケースではありません。それはジェノサイドです。

国際司法裁判所のボスニア対セルビア（2007）で確認されたように、すべての国家は、重大なリスクを認識した瞬間から**ジェノサイドを防止する積極的な法的義務**を負います。この義務は**外交的非難や経済制裁に限定されません**。圧倒的な証拠に直面して、国家はジェノサイドを止めるために**合理的に利用可能なすべての措置**を取る義務があります - 必要であれば、国連憲章の第七章に基づく**強制措置**を含みます。

これには、最低限以下が含まれます：

- ガザ上空の**飛行禁止区域の設定**による空中爆撃の阻止；
- **人道回廊と援助の配達**の促進、必要であれば軍の護衛を伴う；
- **キャンペーンに関与するイスラエル当局者の制裁と孤立**；
- 国際人道法の武器取引義務に基づくイスラエルへの**軍事および経済援助の停止**；
- **共犯者の国際的訴追の支援**。

これを行わないことは、国家を**国際法下での責任**にさらします。**ボスニア対セルビア**のように、ジェノサイドを防止または罰するのに失敗した国家は、ICJによって責任を問われ、**賠償の支払い**を要求される可能性があります。さらに、個人 - 国家元首、閣僚、または軍司令官であれ - は**ローマ規程の第25条および第28条**に基づき、**共謀、扇動、または指揮責任**で**刑事責任を負う**可能性があります。

ジェノサイドは受動的な出来事ではありません。それは政策です。そして、世界はイスラエルだけでなく、それを可能にするすべての国家 - 行動または無行動によって - を注視しています。法的先例は明確です。共謀の政治的コストは上昇しています。介入の瞬間は明日ではありません。今です。